## 第４回 六条円卓会議 開催報告

# 理想の念仏者像を求めて

開催日　2017（平成29）年２月13日

二〇一七年二月十三日、第四回六条円卓会議が開催された。

六条円卓会議とは、内外の有識者の知見を得つつ、「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」（「宗制」）に、宗門がどのように貢献できるのか具体的に模索するために設立された場である。第四回六条円卓会議では「理想の念仏者像を求めて」のテーマのもと、葛野洋明氏（龍谷大学教授）、大八木正雄氏（中央仏教学院講師）、島村美穂氏（仏婦婦人会総連盟副会長）をお招きし、丘山願海（本願寺派総合研究所長）、藤丸智雄（同副所長）との対談形式による発題を行った。そしてそれらの内容に対して、若林唯人氏（フリースタイルな僧侶たち代表）からコメントを頂戴した。その後、参加者が意見を表明しあうワークショップが行われ、ワークショップの結果を踏まえた全体協議が行われた。本稿はその記録である。なお、誌面の都合上、登壇いただいた先生方の発題を中心とした報告としたい。

## 趣旨説明

まず、藤丸副所長より趣旨説明が行われた。本会議は宗門教学会議の議論（詳細は二〇一七年度『宗報』五・六月号）をふまえ、宗務などに還元していくために、宗門関係の有識者の方がたと具体的な議論を展開し、どこに問題があるのかを明らかにすることを目的にしていることが説明された。

そして、本会議のテーマである「理想の念仏者像を求めて」は、「10年、20年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像　答申書」（『宗報』二〇一六年十一・十二月合併号掲載。以下、「答申」）を受けたものであるとし、「答申」についての簡潔な説明を施した。この「答申」には、

①外部環境分析の必要性：宗門外の状況をどのように分析するか

②寺院周辺環境の現状分析：寺院がどのような現状に置かれているか

③新たな育成体系の提案：上記の分析をふまえた寺院像や僧侶像を検討し、これからの僧侶をどう育成していくか

の要素から構成されている。具体的には、政治・経済・社会・文化・技術・環境という六つの外部環境の分析を踏まえ、僧侶や寺院がどうあるべきか、またどのような育成体系を構築するのかといった提案がなされていると説明した。

「答申」の分析と提案は多岐にわたるため、「答申」で提示された下記の三点に絞り議論を進めた。

第一、ご縁のない方がたに対してどう働きかけていくのかという問題提起に対し、「法話」の観点から、伝道学を専門とする葛野氏とともに考えていく。

第二、一般寺院の現場でも「感動を与える儀礼」（「答申」）を執行するためのカリキュラムについて、大八木氏と議論を深める。

第三、「一緒性」（「答申」）という言葉で表される内容を僧侶自身がどのように体現していくのか、島村氏との議論を通じて深めていく。

以上、三つの論点をもとに、白熱した議論が展開された。

## ご縁のない方を対象とした「法話」

龍谷大学実践真宗学研究科で教鞭を執られている葛野氏に、僧侶に必要不可欠な布教について、問題点を示していただいた。

「『初めて法話を聞いた人たち』の声」（『宗報』二〇一六年五月号）に、「布教使課程」「布教研究課程」受講生の法話実演を聞いた一般の方がたの声が紹介されている。そこでは、なかなか法話が伝わらない実態が明らかになった。その理由をまとめると、①「浄土」という言葉が分からない、②今現在の悩みがたくさんあるのに、あの世の悩みだけでいいのか、③信じていない人には共感できない、という三点の問題提起が確認できた。

**葛野　洋明**（かどの　ひろあき）
龍谷大学実践真宗学研究科　教授
浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター（現　浄土真宗本願寺派総合研究所）常任研究員を経て、現在、国際伝道や布教伝道をはじめ、寺院活動についての宗教実践を研究する龍谷大学大学院実践真宗学研究科でも教鞭を執る。

この問題提起に対して、葛野氏は、武蔵野大学が実施する念仏研修での自身の経験をもとに答えられた。この研修は、法話をする前に、釈尊の生涯・大乗仏教の流れ・念仏の源流などを事前に学習し、最後に法話をするカリキュラムになっている。つまり、事前の講義によって学生がある程度の知的理解を得た上で法話をすることによって、心情的なところとリンクして、より味わいを深めることにつながることを指摘された。研修の参加者の多くは、「自分は救われるのか」「自身は救われるけど娘や息子は救われないのではないか」など宗教的な問いを持つことができたり、その答えを感じながら帰宅しているのだという。そのためにはバラエティに富む多様なカリキュラムが用意されていなければならないことを指摘された。

また藤丸副所長より、十五～二十分ぐらいの短時間でしかご縁のない方がたに対してどのような法話であれば法義が伝わるのかという問題提起がなされた。葛野氏は、浄土真宗の本質をついた短い法話、つまり究極の根源のところに根差しているか、もしくはその根源への方向性を持つ話であるのかが重要であると述べられた。また立ち居振る舞いや合掌礼拝の姿などにより、非日常を感じられ、そこに「何か」があるからこそ、普段聞く話とは違うと感じることもできる。「私は死ぬ」「嫌だな」と思うほかはない中で、それを救うという話は、「ほかで聞くことができない」お寺でしか聞けない話があると強調された。

最後に僧侶の布教力の向上には、フィードバックと継続的な鍛錬・修練が重要であることが指摘された。ご門徒や聴聞された方がたから、「先ほどのお話はどういうことなんでしょうか」などの疑問や意見が対等な立場で言い合える場面も大事であるとのことであった。

若林氏からは、『宗報』「『初めて法話を聞いた人たち』の声」には厳しい意見が多く取りあげられていたと感じた。実際には、十五分の法話があった後に感想を言っていただき、その後に一時間半ほど座談会があったが、それらが終わって帰られるときのアンケートでは、今日は来てよかった、仏教のイメージが変わりました、来年もまた来たいですといった感想も多く寄せられていた。ご縁を重ねる中で、一緒に仏法に触れ続ける時間が増える中で、仏法が伝わっていく。法話の内容はもちろん、「また来たい」と思ってもらえるような場のあり方・時間の過ごし方も、整えるべき大切な要素だと思うとのコメントを頂いた。

**若林 唯人（わかばやし ただと）**
**フリースタイルな僧侶たち 代表**

一九八二年生まれ。浄土真宗本願寺派僧侶。京都大学大学院修士課程（社会学専攻）、行信教校を経て、フリーマガジン「フリースタイルな僧侶たち」の編集や、「アラサー僧侶とゆるーく話す会」などのイベントを実施し、日本仏教の未来を模索する活動を行っている。

## 儀礼の役割～感動を与える儀礼とは～

大八木氏は、中央仏教学院にて僧侶として必須である勤式や儀礼について教鞭を執られ、多くの学生を育ててこられた。大八木氏には、僧侶における勤式や儀礼についての役割を示していただいた。

冒頭で藤丸副所長より、現在の得度習礼では、歴史や教義、話し合い法座や儀礼を学ぶ時間など、非常に過密なスケジュールの中、限られた時間での学びとなっている。そうした中で儀礼を学ぶことの重要性についての質問がなされた。

大八木氏は、まず、教義と儀礼の関係から述べられた。教義とは信心の正否を論理的に明らかにする体系であるのに対して、儀礼は正否を峻別することを目的としたものではなく、人々の苦しみ悲しみに寄り添うため、正しくないとされるものも一旦受け入れていく、そのような懐の深さに儀礼の特色があるとの見解が示された。得度習礼の限られた時間では、教義などのように正しさを求めるよりも、お衣を付ける者としてのたしなみや、仏前での心構えをまず学ぶことが大切だと指摘された。その上で、研修の場での儀礼は、僧侶としての基本姿勢を身に付けるために非常に重要だと述べられた。

この度の最大の焦点となったのは、「感動を与える儀礼」（「答申」）である。大八木氏は、人が仏と向かい合う意義や、向かい合い方の規範を示したものが儀礼、勤式の第一義であり、僧侶が仏と向かい合うことを抜きに「感動を与える儀礼」は存在し得ないと指摘をされた。僧侶が本堂で威儀を正して仏と向かい合い、謹み敬い経典を読誦し礼拝をする。そこに阿弥陀如来を中心とする宗教的空間が自然と表出される。その空間に集まったご門徒や有縁の方がたの心底に、「ああ、ここには阿弥陀さまがいらっしゃる」という感動が広がる。つまり、儀礼の場において僧侶の方向が仏に向いていることが原則であり、もしそれが外陣にのみ向いているものであれば、もはや

**大八木 正雄（おおやぎ まさお）**
**中央仏教学院 講師**

本願寺知堂、勤式指導所講師を経て、現在、中央仏教学院通信教育部長。中央仏教学院では多くの学生を育てる。また、西六条魚山会代表を務められるなど、声明の第一人者としても知られている。

宗教儀礼ではなくなると強調され、「儀礼の感動」はこの原則の上で語られるべきだとの見解を示された。

若林氏からは、外陣ではなく、仏さまに向かってお勤めすることの大切さを、改めて教えていただきありがたかった。ただ、儀礼の場全体や、儀礼の前後まで視野に入れると、ご門徒の方を意識すること・配慮することは、やはり、あってもいいのではないかと思う。これからは、先の法話と同じく、儀礼に接する機会はめったになかったという方が増えてくる。ご門徒や、さらには新たにご縁を結ぶ方の立場から見て、今の私たちの儀礼はどのように映っているのか、改めるべきところは無いか、配慮すべきことは何か。現場に立つ前の学びの段階で、勤行とその心得はもちろんのこと、受け手の視点に立った儀礼についての様々な配慮も学べたらいいと思うとのコメントを頂いた。

**島村 美穂**（しまむら みほ）
仏教婦人会総連盟 副会長

浄土真宗本願寺派門徒。鷺森別院 若さぎ会 会員。「和歌山教区仏教婦人会連盟委員長」、「御同朋の社会をめざす運動 中央委員会委員・常任委員」などを歴任し、門徒の立場から宗門に対しての的確な提言をしている。

## 選ばれる僧侶・お寺とは

島村氏は、仏教婦人会総連盟の副会長、和歌山教区仏教婦人会連盟委員長として、仏教婦人会活動を中心に活動をされ、さらには御同朋の社会をめざす運動、中央委員会で常任委員を歴任されるなど、宗門の根幹を支える活動をされている。島村氏には、ご門徒・仏教婦人会の立場から、現状を踏まえた改善点や、これからの僧侶像などについて、丘山所長との対論を通して、ご意見を述べていただいた。

まず丘山所長より、僧侶ではない方が何を考え、何に悩んで生きているのか。そのことにどのように対応できるのかが問題であり、より多くの方がたから見て選ばれていく僧侶、選ばれていく人生とはどのようなものであるのかとの問題提起がなされた。

島村氏は、「答申」に「選ばれる寺院」という言葉があることに驚いたと述べられた。なぜなら、その考えが最近自分自身の中に芽生えている思いと同じであったから、という。自分の子どもたちのことを考えた時に「お寺を選ぶ」という発想も出てくる可能性があることを指摘された。今までのような寺と家という義務的なつながりではなく、子どもたちにとって生きるより所となるお寺、生きる支えとなるような話をしてくれる僧侶とつながってほしい、という思いがある。このようなお寺や僧侶と、個としての「私」とのつながりこそが今求められているものであり、そのことがお寺を選ぶ、ひいては僧侶を選ぶという発想につながっていくのも当然であろうという思いを吐露された。

そして、選ぶときのポイントとしては、共に喜び共に悲しむということに尽きると強調された。話に共感してくれる相手がいると、「ああ、受け止めてもらえた」と感じ、「もう一度話しをしたい、あのお坊さんのお話をもう一度聞きたい」という気持ちになる。また、念仏奉仕団やキッズサンガ、仏教婦人会の行事等の際に、僧侶と私たちが同じ目線に立って一緒に行動をする。その中で、いざという時は自分の生き方を修正して、心豊かに生きる人生を歩めるような気づきを与えてくれる。そのような僧侶であってほしいとの思いを語られた。共に行動をする中から、僧侶と私たち一人ひとりが、互いに影響し合い互いになくてはならない存在になって一緒に歩みを進めてゆくということが大切ではないかとの気持ちを明らかにされた。

最後に、仏教婦人会など普段の活動において意識していることとして、活動を進めていく上で迷うことは多々あるものの、そういう時は自分が今しようとしていることが「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」にブレーキをかけるようなことになっていないか、この言葉の願いにかなっているか、と自問自答して、常にこの言葉に照らし合わせて考え活動を進めていくようにしていると述べられた。

若林氏からは、選ばれる僧侶・寺院ということは、この「答申」の前提になっていると思う。核家族や単身世代が増えるなど、家族の在り方が変わり、これまでの仏教の継承のされ方、家庭の中でお念仏が相続されていくということがなくなってきた。さらには、仏教とのご縁の結び方の感性が、これまでは義務的だったが、これからは選択的になる。つまりは、ご縁を結びたい、結び続けたいと思うか否かが、決め手になる。そこにどう応えていくのか。仏法を相続していくために、この点を強く意識しなければならないと思う。「答申」では、これまでの真宗の様々な特徴が「一緒性」という言葉で表されているが、島村さんのお話をお聞きして、この「一緒性」が、これからの真宗の未来も開いていくキーワードの一つになるだろうと感じたとのコメントを頂いた。

（本願寺派総合研究所 教団総合研究室）